

I : 宗教現象としてのキリスト教

<前回> 信仰 (S→)

1. 信仰への現象学的アプローチ (宗教現象学)
 - 「多様な現象の記述 (判断停止・エポケー) → 類型化 → 基本構造・基本要素の分析」
 - 「既知→未知」、「理想化」、「概念化」
2. キリスト教信仰の典型 (ティリッヒ): 「心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くし、力を尽くして、あなたの神である主を愛しなさい」 (マルコ 12:30)
3. 「心・精神・思い・力」: 知情意すべてを統合した全人格的な現象 → 「関心」
4. 「尽くして」: 日常的コミットメントが予備的 (相対的、部分的) であるのに対して、関心対象への関わり・コミットメントが、全体性あるいは絶対性 (→「究極性」) という質を帯びる。→ 「究極的関心」 (ultimate concern)、日常性の極限值
5. 「あなたの神」: 信仰の実存性。行為についての目的と主体の問い → 「神」と「自己同一性」との相関関係 → 宗教の普遍性 (広義の宗教)
6. 信仰は、人間の人格の全体性において現象する究極的関心であり、信仰者の自己同一性を規定する。

第4講：聖なるもの (1) —宗教類型論と人格神—

1 宗教類型論と人格神

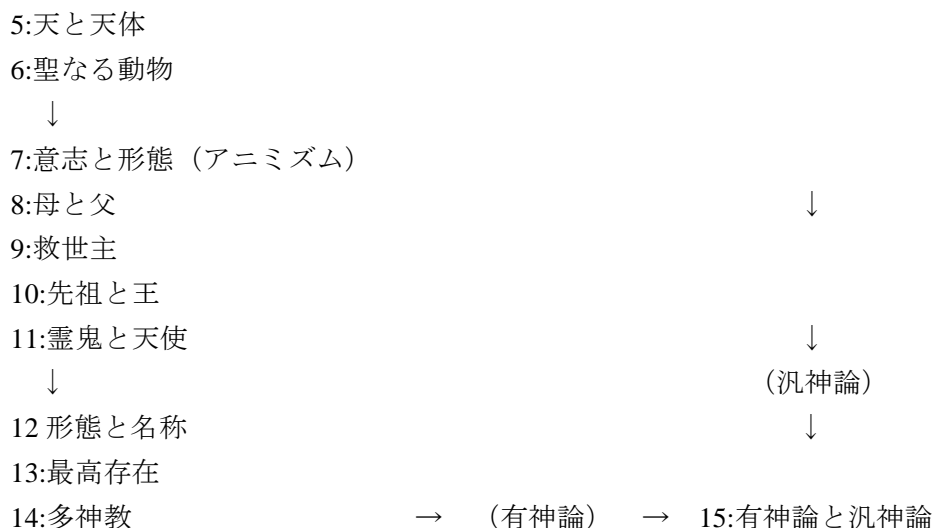
Q : 「S-M-O」における「O」(信仰の対象) とは何か → 聖なるもの (das Heilige)

Q : キリスト教における信仰対象としての「神」は、人格神と言われるが、それは多様な諸宗教の信仰対象の中でいかなる位置を占めるのか。

(1) 聖なるものの現象学

1. 世界における諸宗教において、その信仰対象はきわめて多様であり——信仰対象については、「聖なるもの」という表現がとられる。神はその一類型と考えられる——、その多様性を適切に処理するために、現代宗教学では、宗教現象学の方法論が採用される。それは、前回「信仰」について述べたのと同じ方法論である (現象の記述と類型化→基本要素・構造の分析)。したがって、多様な信仰対象は、まず類型に整理される。
2. 本講義では、宗教類型論の古典的研究として、ファン・デル・レーウの『宗教現象学入門』(東京大学出版会)を紹介する。
3. 『宗教現象学入門』の信仰対象 (聖なるもの) についての項目は、次のようにまとめられる。

1:原始的な力	→	2:思弁的な力
↓		
3:力ある物 (呪物崇拜)	→	(ディナミズム)
4:力ある世界 (聖なる木、石、水、火)		



4. 各類型について、簡単に説明しておこう。

- ・「原初的な力」：聖なるものの経験の第1の特徴（宗教経験の大前提）は、非日常的な力の経験である。たとえば、イギリスの宣教師コドリントンによって報告された、メラネシア人の「マナ」についての信仰である。マナはあらゆる場所、事物に遍在している力であり、あるものがマナを帯びるとそれは著しい力をもったものとして経験されることになる。非日常的な力の経験は、聖なるものの成立の第一条件である。

cf. 日本における「憑きもの」と比較せよ。

- ・「思弁的な力」：「原初的な力」はそのときどきに強烈なパワーとして経験されるものの、持続性や形態性に欠け、不安定である。この力の安定化は、力を宇宙全体へと拡張することによって可能になる。ここに成立するのが「思弁的な力」（万物の貫き、それを支配する法則的な力）の類型であり、たとえば、中国の道（タオ）、ヴェーダ宗教の天則（リタ）、古代ギリシャの原理（アルケー）などである。
- ・「形態化」：「原初的な力」の不安定さを克服するもう一つの方向性は、力の場・担い手を限定し形を与えることである。これが、類型「1」から「3」への繋がりである。形態化された聖なるものは、いわゆる無機物から有機物まで、極小から極大まで、多岐にわたる。
- ・「意志」：力が、単なるパワーではなく、一定の意図・意志を伴って経験されるとき、次の諸類型が生じる。ダイナミズムからアニミズムへの移行（これは類型間の関係であり、歴史的な生成順序を必ずしも意味しない）ということも可能である。
- ・「名称」：聖なるものは、名称・固有名を有する存在として経験される場合、それは優れた意味で「神」と呼びうるものとなる。天照大神、YHWHなど。
- ・キリスト教的聖書的な神においては、有神論的類型（力／形／意志／名）と汎神論的類型（力／法則）の両方の類型要素がバランスをもって結びついている。

5. 聖書の神・キリスト教の神

日常的・俗的なものから際立った力：天地創造、復活

意志（自由の主体）：善意志、人類救済

形態：

名称（名）：YHWH（四文字神名、Tetragrammaton）、イエス・キリスト

↓

聖書の宗教は、神の存在を信じるといって有神論であり、その神は、人格神である。究極的関心を可能にするほどの力で人間に関わり、コミュニケーション可能な意志的な存在者（意志・形態・名）、「神－人間」においてイニシアティブをもって振る舞う存在者

5. しかし、「形態」については微妙な問題が残る。なぜなら、聖書の神は、偶像禁止の戒律によって示されるように、不可視的であり（見えない、見てはいけない）、霊的であるとされるからである。人間の感覚全般・日常性を極端に越えているという点で、神の超越性が強調されている。これをもっとも徹底しているのが、イスラーム。

かといって、「イエス・キリストは真の神である」と言われることからわかるように、キリスト教信仰の神は超越的霊的であるにもかかわらず、人間の形態（僕の形）をとった（受肉した）、と考えられている。

Q：では、形態を完全に失った神はどうなるのか → 次回の講義

Q：そもそも、人格とは何か？

（2）人格とは何か

6. 宗教類型論から見て、「人格」とは、力／形／意志／名という諸条件を兼ね備えた存在者あるいは存在様式と言える。コミュニケーションの主体となりうる存在者であり、祈りの対象となるという点で、神はまさに人格的である。
7. しかし、人格という問題は、決して単純ではない。伝統的に、人格理解には、次の二つの観点が存在してきた。

（1）個別性・個性 → これはしばしば実体化され理解されてきた。

個の実体として実体化された近代的自我の主体性

（2）共同体性・社会性：人間が人格性を獲得するのは、共同体的な相互交流においてである。関係性としての人格性。

8. 近代的な単一的主体概念に対して、現代思想においては、人格の多元性を強調する傾向が顕著である（実体形而上学や本質主義に対するポストモダンの批判）。

「精神分析は、主体は統一的な性格をもつものであるとする考えを掘り崩した。フロイトの中心的な主張は、人間の精神は不可避免的に二つのシステムの分断にさらされており、その一方は意識できない、ということである。ラカンはフロイト的洞察を展開して、次のことを示した。一つは、あらゆるアイデンティティに浸透している明確な帰属意識の複数性——象徴的なもの、現実的なもの、想像的なもの——である。またもう一つは、空虚でありながら同時に破壊する場であり、かつあらゆるアイデンティティを構成する条件であるような、そうした空虚な場——それは構造内に表れているのであるが——としての主体の場を示した。」（ジャンタル・ムフ『政治的なるものの再興』日本経済評論社、154頁）

9. Q：人格の多元性という議論は、「人格神」の、つまり「神」の本性の多元的理解を帰結するか。人格概念をめぐる本質主義批判は、伝統的な神理解に対して、いかなる関係にあるのか。

実体形而上学的ではない神の人格性！

10. なぜなら、「信仰と自己同一性」で議論したように、神（広義の）と人間とは相関関係にあるからである。 → 神と人間の同形性。

ここからはさしあたり、キリスト教の伝統的な神の似像性（Imago Dei）の教説とフォイエルバッハの投影説の双方が、それぞれ方向は逆であるが、成立することになる。

神の似像性の教説：神が自らに似せて人間を創造した、だから、人間は神に似ている。

フォイエルバッハの投影説：人間は自らの類的本質をいったん外部へ投影することによって（外化・客体化することによって→自己疎外）、類的本質を認識する。人間が神を自らに似せて創り出した、だから、神は人間に似ている。

11. 現代宗教学は、有神論と無神論といった神の实在性をめぐる判断を保留して進められる。神の似像性の教説もフォイエルバッハの投影説も、同じ資格で問題となりうる。

<創世記>

1:27 神は御自分にかたどって人を創造された。神にかたどって創造された。男と女に創造された。

<参考文献>

1. ファン・デル・レーウ『宗教現象学入門』東京大学出版会
2. G. ランツコフスキー『宗教現象学入門』海青社
3. 金子晴勇『聖なるものの現象学——宗教現象学入門』世界思想社
4. フォイエルバッハ『キリスト教の本質（上）（下）』岩波文庫
5. ポール・リクール『他者のような自己自身』法政大学出版局